# 栞集を読む

松岡　隆子

夢はみな未完のままに明易し　　鈴木　富代

私もよく夢を見るが、確かにいつも未完のままだ。厭な夢や恐ろしい夢は未完のままの方がよいが、何となくほんわかとした夢は続きが気になることがある。懐かしい人と談笑したり、先生に褒められている夢など、もう一度眠って続きを見たくなったりする。短夜を惜しむ思いは未完の夢を惜しむ思いに通じるものがある。もっとも私の場合はそのような良い夢を見ることは滅多にないが……。

飛魚の眼に大空の青さかな　　西島　美晴

初めて飛魚が飛ぶのを見たのは五島列島へ行くフェリーの船上からだった。その見事な空中滑走に目を瞠った。飛魚の青い目に空の青さが滴る。飛魚は空を飛びたいのかもしれない。歳時記を見ると「秋に南へ帰る燕の子が海中に落ちて魚に変じ、親恋しさに空中を飛ぶと考え燕魚の別名もある」と書かれているが、掲句はそれを踏まえて詠んだのではなさそうだ。西島さんの発想はいつものびやかで自由である。

夏の雨コンビニまでは傘要らず　　見上　恵

今やコンビニは町の至るところにあると言っても過言ではあるまい。わが家からも百歩も歩けば三か所のコンビニに行き当たる。一か所は郵便ポストも備えてあるので重宝している。掲句の場合はごく近くのコンビニのようだ。多少の雨でも急ぎ足で行けば傘は要らない。夏の雨は明るくからっとしていて少しくらい濡れても苦にならない。中でも新緑の頃に降る雨は緑雨と言われ美しい。春雨のように濡れて行きたい気分になる。季語の〈夏の雨〉が些事を詩にしている。

日傘閉づ木漏れ日溢る樅の森　　小泉　恵子

樅の新樹から降る木漏れ日はひんやりとして目映い。高々と風にそよぐ葉擦れの音もこころよい。畳んだ日傘を脇に挟み森の奥へと木漏れ日を踏んでゆく。まさに森林浴、心身が浄化されていく。〈日傘閉づ〉に作者の立ち位置が見られ、確かな一句となっている。

あたふたと夏蝶のゆくビルの谷　　三宅まどか

高層ビル群を飛び惑う夏蝶の姿が見える。青々とした夏野や緑の森を飛ぶのと違い、とんでもないところに迷い込んだものだと蝶も慌てている。あたふたとビルの谷間を行く夏蝶、それはあたかも大都会の空間を彷徨う人間の姿のように

も思える。都会派の三宅さんらしい把握である。

**ともすれば気を張りつめし花擬宝珠　矢作　裕子**

ご夫君が亡くなられたのは「栞」創刊の年だったのでよく覚えている。あれから七年、この間矢作さんは遺されて生きる日々の哀感を日記のように俳句に詠んで来られた。二人の子供さんも成長されたとは言え、気を張りつめた暮しはいまも続いていることだろう。擬宝珠の花に呟きが零れる。

**たはやすく昼を眠りて菜種梅雨　田辺　文枝**

春は眠い。降り続く雨に本など読んでいるといつの間にか眠くなってくる。たわやすく眠ってしまうのは加齢現象の一つかもしれないと思いつつ、それを自然体で受け止めている。晩春の季語である菜種梅雨は暗い梅雨のイメージはなく艶やかで明るい。情感のある菜種梅雨が佳き眠りを誘っている。

**物憂さの何はさておき昼寝かな　堀　すみ江**

物憂さも何のその「先ずは昼寝」と昼寝を決め込んでいる。実際に一日に三十分程度の午睡は健康の増進にもなるようだ。物憂い時は眠るに限る、という好日的な生き方に共感する。眠っている間に物憂さも薄らいでゆくことだろう。

前掲句と同様に昼寝を肯定的に捉えており、敢えて並べて鑑賞してみた。

**さざ波の先に睡蓮開きけり　眞保　勝江**

〈さざ波の先に〉という写生の確かさに注目した。〈先に〉と言うことで、日差しにきらめくさざ波の拡がりが見え、次に咲き拡がる睡蓮の花の白さが見えてくる。睡蓮を白とみるか紅とみるか、それとも両方入り混じっているとみるかは読者に委ねられているが、作者もおそらく真っ白な睡蓮の咲き拡がる静謐な景に囚われているのではなかろうかと勝手に想像した。

**山梔子の香りもろとも押し花に　阿久津早智子**

山梔子は清新な花の白さも然ることながらその甘い香気が魅力的な花である。山梔子の花を香りごと押し花にする。純白の色はいつか褪せてゆくだろうが、その芳香も失せてしまうのだろうか。こんど試しに押し花にしてみよう。押し花にしていつまでもその残り香を楽しむことができたら素敵だ。

**その他の印象句**

水無月の水満々と千枚田　梅澤　惇子
雨のまだ滴る草や夕蛍　早出　誠治
吹かれては月の色なる月見草　晴　涼風
かんかん帽みぎへひだりへ蚤の市　伊藤　生子
梅雨空や水まんぢゅうのやうな月　森田　道子
微かなるもの音なるは竹の秋　芝　京子